

大町桂月にみる美文

—『花紅葉』と『黄菊白菊』を中心に—

湯本 優希

1. はじめに

美文は、明治29年に博文館より刊行された塩井雨江・武島羽衣・大町桂月による合著『叢花紅葉』に端を発し流行した。

この美文という名称について、「明治の美文と紀行文」を著わした高須梅溪(芳次郎)は次のように回想している。

一体、美文といふ名称は、改めて考へる迄もなく、余りに、漠然としたもので、適切だつたとは云へない¹⁾。

梅溪は美文を「新国文とでも称した方が、より多く妥当であらう」と「新国文」との名称を提示したが、あくまで「妥当」であるとしており、文体としての定義の難しさがうかがえよう。

さらに、たとえば明治30年に『早稲田文学』に創設された「美文」欄を見ると、詩や小説、戯曲、紀行文などが含まれており²⁾、美文は特定の文章ジャンルを指し示すものとして広がっていた名称ではないことが看取できる。

一方、こうした美文の流行を機に、美文を書くための作法が説かれた作法書や文学作品の抄録が収められた文範書など、さまざまな用途に応じた作文書がそれまで以上に数多く刊行され、売れ行きを見せていた。さらには美文に用いるための語句を編んだ美辞麗句集があり、簡易的に美文を書くことができる資料が数

多く流通し、作文が流行した。こうした状況の中、投書雑誌に自身の文章を投稿する作文者が急増した³⁾。このように美文ひいては作文はアマチュアの投稿者をも巻き込んだ大きな流行となっていたが、そこでも各雑誌や投稿者によって美文の文体やジャンルは異なり、一定の方向性があったとはいえない状態であった。

本稿では、このように文壇以外の層をはらんだ大きな文章表現のうねりであった美文の実態を検証することで、回顧的な視点からではない美文の定義を問い直し、近代文章表現史の中の美文の位置づけを再考したい。

そのため、本稿では美文流行のさきがけであった『花紅葉』の中で最も多く美文を執筆し、同時期において専ら良い文範とされ、また、自身も数多く美文に関する記述を行っていた大町桂月の美文観と表現を検討したい。

2. 美文の評価

まずはこれまで、美文がどのように位置づけられてきたか確認していこう。

山本正秀氏は前掲の高須梅溪と同じく、美文を明治期における文体が混沌とした中に登場した「新国文(美文)運動」の文体とした⁴⁾。また、美文を「和文脈の多い優雅な性質」と久松潜一氏が解説し

ているように⁵⁾、美文はその基盤に和文を有すると見られてきたといつてよい。

進藤咲子氏は、美文を「古今の小品、随筆、紀行文、小説等の抒情的雅文の呼称」と述べ、さらに「詩の精神を中核とし」としているとその内容面から共通性を挙げている⁶⁾。ここでも依然として「雅文」と記されており、和文脈という基盤がうかがえる。

こうした定義の中で、例えば、『花紅葉』の中に収録されている、漢詩が五首挿入され、漢詩文に基づいた表現や漢語が多用された作品である桂月の「日光山の奥」は、例外的な作品として位置づけられてきたのである。これまで美文は、主にその実作に基づいて言及されてきた。しかしながら、桂月「日光山の奥」に加え、これと同様に漢語が多用された武島羽衣「秋の山ぶみ」などのように、和文脈の中に括りきれない作品が出てくるのである。

一方で、若干時代は下るが、田山花袋は『美文作法』(博文館、明治39年)において、次のように記している。

かういつて来ると、美文はあらゆる文体に関係を持つて居る。美文と謂ふ文字は文体ではなくて、各種の文体に必要な分子であるといふことも解る。更に詳言すれば、美文とは文章各種に於ける美の表現、即ち修辭上の美的発現の方法、思想上の美的修養の手段に就いて縦から一貫した形で、もしこれを厳密に説かうとすれば、一面修辭学から一面審美学の深奥なるあたりまで進まねばならぬ。

花袋は美文を「文体」の一種ではなく、

さまざまな文体の「分子」であるとしている。これについては、先の山本正秀氏『近代文体発生の史的研究』の中に「美文素」という語が幾度も登場していることが挙げられる。こうした「分子」という捉え方がありながらも、これまで美文は和文を基盤とした文体の一種としての見方がなされてきたのである。

さらに山本康司氏は『明治詩の成立と展開—学校教育との関わりから』(ひつじ書房、平成24年)の中で、学校教育は美文のような文章、すなわち審美的な「美感の形成」へむかっていったと述べた。

3. 大町桂月における美文

『花紅葉』の著作者のひとりであった桂月は美文や紀行文など多様な文章ジャンルにおいて数多くの作品を執筆したが、とりわけ美文家として世に喧伝されていた。この桂月の美文に関する記述を整理していこう。

桂月は『花紅葉』の「序」において、次のように述べている。

而して、その字句に拘束あるものを韻文といひ、拘束なきものを美文といふ。議論論述の文、絢爛を極むるも、美文となさざるは、その本質、詩にあらざればなり⁷⁾。

桂月はここで美文も韻文もいずれも詩であると示している。そして、その差異について、「字句」の「拘束」の有無であるとし、形式的区別のみを掲げているのである。さらに、桂月は「韻文」でも「戯曲」でも「小説」でもない「純粹の美文」があるとしているが、それについては詳述されていない。

この合著『花紅葉』の2年後に、桂月の

個人美文集『黄菊白菊』（博文館、明治31年）が刊行された。この『黄菊白菊』の序文の中で、桂月は『黄菊白菊』に編んだ自身の美文について次のように述べている。

而して、この三四年の間、余がものしたる美文韻文は、花紅葉と黄菊白菊とに尽く。国家の盛衰と死との二篇は、やゝ美文の範囲を脱せるが如くなれども、もともと感情を據べたるものにて、理を説きたるものにあらねば、美文としてこゝに収めたるなり。

ここでは、「国家の盛衰」と「死」という2篇が桂月の考える美文の枠からやや逸脱していると記しており、桂月にとっての「美文」が「感情」を描いたものとして定義されていることがわかる。そして、「理」を説いただけの文章は「美文」ではないとの主張がなされている。

これと同様の主張は散見される。たとえば『黄菊白菊』と同年に刊行されている『詩及散文』（新撰百種第7編、普及社、明治31年）では、「散文にして、詩となり得べきは、おもに叙事文也」とし、ここでも「所謂美文も亦詩也」との記述が見られる。

このように桂月は多数「美文」に関する論述を行っているが、いずれも文章の内容が「詩」であれば美文であるとしている点が共通しているといえよう。

さらに、『文学小観』（新声社、明治33年）の「読書の楽」では、次のように述べている。

成る程、詩歌美文を誦すればとて、処世の方を覚ゆるに非ず、金まうけの策を得るにもあらず。得る所は、

感情の満足にして、品性の涵養之に伴ふ。

ここでは、美文を誦することが感情の満足に繋がると指摘している。桂月にとっての美文は、感情が描かれたものであり、読むことで感情の満足が得られるものであったのだろう。

では、桂月は表現形式についてはどのように考えていたのだろうか。

桂月が美文を「詩」であると認識していたことに鑑み、『花紅葉』および『黄菊白菊』と同時期の詩歌に関する記述を見ていこう。

まず明治30年4月、自らが編集に携わっていた『帝国文学』第3巻第4号（大日本図書）誌上において、桂月は以下の「詩歌に於ける古語及び俗語」を発表している。

歌ふべき詩の目的を達せんが為に、其用語は、高雅、優美、渾厚、莊重にして活気あるものを用ゐざるべからず、平常の用語と同じきは、これ詩に非ず。殊に其散文的なるを避けざるべからず。散文は唯真実を語るものにして其構造もと美を謳歌するものにあらざれば也、余は断言す、詩語の要諦の一は古語を用ゐるに在りと。これ余が一家の私見に非ず。多くの修辞学者が修辞学に於てほぼ一致せるの説也。

桂月における「詩」とは、先述の『花紅葉』の序文のように韻文としての詩歌を指している場合もあれば、散文である美文を詩に含めている場合もあり、厳密に区分されているとは言い難い。ここでは詩歌について述べているものの、文章においても「用語」に重きを置いている態度は

多く見られる。桂月にとって形式面での意識は主に「用語」にあるといえる。

そしてその「用語」について、桂月「詩歌に於ける古語及び俗語（承前）」（『帝国文学』第3巻第4号、明治30年5月）では、次のように著わされている。

古語とは必ずしも奈良朝の語にあらず、必ずしも平安朝の語とも限らず。

古語とは今日平常の對話に廢れたる言語の謂也、

さらにここでは、

擬古とは、徒に古人の作を摸擬するの謂にあらず、乾燥なる俗語、俗語体、もしくは散文的臭味を避けて、美しき古語を活用し、古句法、古格調を利用して、新詩の美をなさむとする也。

と続け、擬古的な用語による修辭は「散文的臭味を避け」るものとされている。古語とは日常の語彙から離れたことばであり、それらの「美しい古語」を活用することを桂月は擬古と呼んでいるのである。

これまで美文は「擬古文」とも称され、桂月のいう「奈良朝」や「平安朝」の流れに位置すると見られてきたが明治30年の時点で桂月はそれにとどまらないことを記している。

さらに、「小説の諸文体の得失」（『文芸倶楽部』第4巻第5編、博文館、明治32年4月）では、桂月は美文を「人物性格に重きを置かない文章」だとしている。これは桂月にとっての美文が虚構の世界を作り上げることを目的としていないからではないだろうか。美文には、小説の中の登場人物の設定が詳述されることがよくないことからわかるだろう。

桂月はこのように美文に関する記述を重ねているが、明治32年の1月の「時文過去一年間の文壇」に、次のような記述も見られる⁸⁾。

修辭学未だ世に行はれず。羽衣修辭学を著はしたれども、何等の反響もなし世はまた美文の価値を認めず。（中略）和漢を調和し、西文の趣味を加ふべきは、文人の急務、而かも之を企てむとするものなし。

桂月個人の美文集『黄菊白菊』が刊行された翌年の明治32年1月に、桂月は美文が世間から認められていないと述べている。さらに、桂月は文章における「和漢の調和」や「西文の趣味を加」えることなど、目指す文章を語っている。その中で、文章において詞藻に重きを置かなくなってきた風潮を嘆いているのである。

桂月は明治28年、すなわち『花紅葉』が刊行される前年に、すでに論文や美文の名家として世に喧伝されていると桂月が名を挙げた依田学海、森鷗外、徳富蘇峯らにはみな漢文の素養があると指摘しており、桂月は美文の要素の中にやはり漢文を見ていたということが看取できよう⁹⁾。

また、明治33年10月には『太陽』第6巻第12号（博文館）の「時事評論 文芸界」の中で「文章修練の点に於て、美的感情涵養の点に於て、個性發揮の点に於て」、むしろ「文科志望者」でない学生にこそ漢文の素養を学ばせるべきだとしている。このように「美的感情」が桂月にとって念頭にあることが表れているといえるだろう。この時期桂月は漢字廃止に反対する旨の論述を繰り返しており、そういった背景からも漢文の表現に対する

素養の獲得が殊更強調されていたといえよう。

すなわち、このように桂月の美文の形式面に関する記述を見ていくと、桂月にとっての美文は和文脈に基盤を持つ文体として限定されていないことがわかる。和文脈に加え漢文脈における「警句」や「詞藻」、「文字」を積極的に取り入れ、その調和が目指されていたことは明瞭であろう。

桂月は明治40年に「半生の文章」と題した、自身の文章史についての回想を執筆している。

余は多く所謂美文をつくりたりき。
和文漢文をあはせてやゝ今様にしたもの也¹⁰⁾。

後年の回想ではあるものの、桂月は自身の美文を振り返り、このように記していた。

桂月は文字や語句といった詞藻の豊かさを意識していたのである。すなわち、桂月にとって美文であると定める形式的な要素には、散文であることと、和文や漢文といった文体の種類ではなく、和漢の表現を取り入れていくことが挙げられている。そしてそれに拘泥した様子が看取できる。

美文の形式については羽衣が桂月と同様に「和漢文体の長所を搗きまぜ¹¹⁾」たと回想していることから、こうした桂月の論述は桂月のみの認識ではなかったといつてよいだろう。

桂月は前掲の「半生の文章」の中で『花紅葉』や『黄菊白菊』を執筆していた時期を回想したのち、「文字に拘束せられずして、人を動かす所ありて、文章はじめて美也」と述べている。このように桂月

は「文字」に関する記述を重ねており、明治40年という美文の陰りの時期や同時代の文学的背景とともに多くの検討の余地が残されているといえる。

4. 桂月のジャンル意識と美文における表現

次に桂月の美文に対する文章ジャンルの位相について整理していこう。

『花紅葉』の中で唯一漢詩が挿入されている「日光山の奥」は紀行文である。ここに収められている文章ジャンルはさまざまであり、これは桂月に限らず、『花紅葉』全体に通底している。

桂月は、『花紅葉』および『黄菊白菊』に多岐にわたった作品を「美文」として編んでいる。

桂月は、明治31年6月、『文芸倶楽部』第4巻第7編（博文館）の「時文 文学と時世」の中で紀行文について「拙劣なる小説、新体詩よりは、遙に面白き心地す。然れども、未だ全く我心を満足せしむべき紀行の文体を見ず」と述べている。桂月は和文による紀行、漢文による紀行をそれぞれ批難し、以下のように記している。

近時中小説家、美文家などの紀行には、時に面白く感ぜらるゝものあり

桂月自身も『花紅葉』および『黄菊白菊』に紀行文を収めているが、桂月にとっての紀行文と美文が比較的近い位置づけにあったことがうかがえよう。

さらにここからは、桂月にとって「小説家」と「美文家」がそれぞれ区分されていたことが見てとれる。先の『花紅葉』序文の「純粹の美文」という分類にも見られることから、桂月にとって美文はいわ

ば独立したジャンルであったともいえる。

桂月にとって紀行は「文学(=詩)」に成り得るものであり、「美文」のひとつとして認識されていた。

さらに、桂月は『文学小観』(新声社、明治33年)の中で次のように述べている。

東洋には叙景の詩多し。これ天然を愛好すること、西人と趣を異にするに由ることは、言を待たざれども和歌、絶句の如き短詩形は自から叙景に適すれば也。

このように、桂月は東洋の短詩形は叙景詩に適していることを指摘しており、桂月にとって、「叙景」が「詩」と非常に近い位置、さらにしばしば重なる位置にあったことがうかがえよう。

たとえば明治35年12月の『太陽』第8巻第15号に掲載された「文学の種類に就いて」において桂月は、

或種の紀行は、文学なれども、地理、地文の書は、文学に非ずと述べている。

こうした「紀行」を「美文」とみる見方は、芳賀矢一・杉谷代水『作文講話及文範』(富山房、明治45年)にも表れている。この『作文講話及文範』においても、「美文」に分類された文章分類には、「歌」「俳句」「漢詩」などに並び、「紀行(或種の)」と記されているのである。

このように、桂月にとって、紀行文は美文と重なったものであった。

続いて、桂月の『花紅葉』および『黄菊白菊』に見られる美文表現の分析に移ろう。

次に挙げるのは、先述の紀行文「日光山の奥」に見られる、湖と空を表現した

部分である。

五色湖の、青靛として大空と相映発するさま、既に奇絶なるを覚ゆ。

『花紅葉』とほぼ同時期の明治29年12月に刊行された作文書、中山子西著、竹田左膳関『記事論説作文活法』(両輪堂)の中に編まれた同様の表現が次のように見られる。

・花光相映シ粲トシテ錦ヲ濯フガ如シ

・花水相映シテ燦爛タリ

また、同じく明治29年刊行の的場銈之助(麗水)『記事論説日本作文資料』(文陽堂)では、

・樹下竹外碁峙繡錯夫ノ隴麦塙柳山光海色ト相映発ス

などが挙げられている。

この『記事論説作文活法』をはじめ、明治29年から明治30年という『花紅葉』と同時期に刊行されたこうした作文書には、このように、「湖」と「空」、「花」と「光」、「花」と「水」などのように、目に入る景色の全景の中でそれぞれ美しく輝いているものをふたつ掲げ、それらが「相映す」「相映発す」として美しさを競いあっている様子を表し、その勝景を表現していた。こうした美辞麗句には、桂月の表現と当時の美辞麗句集の中に採録されている表現に通底するものが数多く見られる。

さらに、桂月は滝を形容する際、

李白所謂飛流直下三千丈、疑是銀河落九天の看を^{ミツ}違うことを得ず

と、李白の漢詩であると明示してそれを引用している。桂月はこの李白の漢詩を踏襲した美辞麗句を、さまざまな類型表現に転じさせながら幾度も挿入してい

る。

この湖水の末また一決して華嚴瀑となり、峭壁の下に直下すること数百仞、

さらには、

男体山と大真子山との間より滴る清水の末、一たび懸りて慈観瀑となり、などが例示されよう。このように、李白の漢詩文から得ている銀河、すなわち天の川が落ちてくるというイメージを踏襲しつつながらもさまざまな表現へと変化させているのである。

桂月は、同時期の明治31年3月の『文芸倶楽部』第4巻第4編では「自作自釈」として自身の「琵琶滝」についての文章を記しているが、その中においても総括として李白のこの漢詩について触れている。

類型表現としての滝に関する美辞麗句は、同じく『花紅葉』の中に華嚴滝を描いた武島羽衣「秋の山ぶみ」があり、次のような表現がある。

こは華嚴のたきのひゞきなりといふに、(中略)みづ烟たかく立のぼして、滝つば幾千尋の下ともわかざるに、しぶきちりまがひて、ほどこかき木立も見えず此国に二つなきものとかねてきゝわたりつるに、

桂月に比べ、その表現の下敷きに李白の漢詩があることはうかがえるが、桂月に比べると漢文脈の表現が弱い。このように叙景の際に漢詩文を下敷きとした表現を行い、漢文脈の表現が前景化されるのは『花紅葉』の中で全体に共通する傾向にあるが¹²⁾、とりわけ桂月はこうした類型表現に限らず、紀行文の執筆に際して、漢語を多用し、より漢文脈の強い表現を

用いていることが特徴であるといえよう。

唯一漢詩が挿入されている「日光山の奥」は『花紅葉』の中で例外的な扱いを受けていたとすでに述べたが、こうした漢詩の挿入は、『黄菊白菊』にも見られるのである。

「御嶽めぐり」(『黄菊白菊』博文館、明治31年)は紀行文であるが、その中には次のような箇所がある。

山重水複疑無路、柳暗花明又一村と
うたひけむ、放翁の詩句、今更に靈活なることを覚えて、高らかに朗吟すれば、山応へ、水鳴る。

ここでも漢詩が挿入されていることが確認できるが、それだけではない。いずれも、紀行文における漢詩の引用に際し、必ず典拠が明示されているのである。すなわち、桂月には紀行文を執筆する際に、その場面に適した漢詩の紹介という意図が別にあつたのではないだろうか。そして、二度にわたり美文集の中に漢詩を収めていることから、こうした漢詩の挿入についても例外的な作品があるわけではなく、あくまで意図的に行っていることが看取できよう。そして、そうした漢詩を含む文章も美文であると捉えていたことは明白だろう。

このことから桂月は『花紅葉』の他の作者二人に比べ、叙景、とりわけ紀行文において漢語や漢詩文に基づいた漢文訓読体の表現などをより強く意識し、美文を執筆していたことがわかる。

しかしながら、たとえば『花紅葉』の「墓畔の秋夕」では、次のように始まる。

心づくしの秋の夕、何となう涙のこぼるゝに、亡きあにのこと思ひい

で、青山なるその墳墓にまうでぬ。これまで漢文脈の強い表現を主に見てきたが、このように桂月の美文には当然ながら和文脈が強い表現は数多く見られる。

また、『花紅葉』に収録されている「荒野の鶴鴒」では、旅先で聞いた物語という枠物語の形をとりながら進んでいく小説のような作品となっているが、小説とも紀行とも断定できない物語となっている¹³⁾。

われは六十六国をまたにかけて、何処ともなく漫遊するものなるが、それは徒に山水に放吟せんとにはあらで、持つたが病の考古詮索、あまねく名所旧跡の由来沿革を知らむとなり。

このように和文脈が強い表現ではあるが紀行文としても読むことができるように描かれている。先にも指摘した通り、『花紅葉』および『黄菊白菊』において収録された桂月の紀行文の共通点として漢語が多用され漢文脈の表現が数多く見られるということが挙げられるが、この「荒野の鶴鴒」では紀行文のような書き出しでありながら和文脈の強い文章表現であり、桂月の文章としては小説のような雰囲気を感じ取れるのである。

桂月がふたつの美文集の中で用いている和漢の表現に対する小説と紀行文というジャンルによる使い分けがここでは曖昧になっている。紀行文のような体裁を取りながらも漢文脈に根ざす表現が強く出ていない。しかしながら一見和文脈の表現が強いものの、小説とも言い切れない。枠物語の紀行文と小説という揺れの仕掛けだけでなく、こうした文体や文章

表現の仕掛けもこの作品を幻想的、美的にしているといえるだろう。

また、小説の文体には、次のような表現もある。

那須野の原に砂烟立て、ゆく道すがら、梅子はせめてお顔をと思へど、見ゆるはたゞ後姿、(中略) つひに困うじて、あなた、あの高い山はと半ば問ひかくれば、どの山と云ひつゝ後むくに、(中略) これはまた意味ありげなる微笑を洩すに、心／＼惑ひて、滴る汗をぬぐひも敢へずあれば何と云ふ山でせう、アゝ暑いこと。

これは桂月の『黄菊白菊』の中の「猿塚」という小説作品である。先の「われ」という旅人とは異なり、「梅子」と登場人物に名前が付けられており、物語が進んでいく形態の作品である。この小説の中には、このように地の文に会話のような心中語がたびたび入り込んでいる。もちろん美辞麗句のような類型表現や漢文脈が強い箇所もあるが、やはり時折挿入される口語文の表現が目立つ。

浮世にては厭世だの、楽天だのと、己れの小さいことの尺度を以て妄りに天地の意をはかる学者の出来損ひもあれど、悟つて見れば楽天もなく、厭世もなし、おれも娑婆に居た時分、これ位の事は知らぬでもなかつたが、心が迷うた悟りが全く開けなかつた。

他の桂月の美文作品では、文体として口語文が多く挿入されていることはあまり見られない。

そして、作品のジャンルについてだけでなく、同じ作品内であっても例えば人物の描写か、風景の描写かといった描く

対象によっても、和漢の表現はさまざまに用いられていく。

こうして、『花紅葉』および『黄菊白菊』に用いられている表現を見ていくと、桂月が「美文」の中で文体やジャンルを横断しながら実践的にさまざまな文章表現を用いて、多彩な文章表現を仕掛けていく様子が見えてくるだろう。

5. おわりに

これまで見てきたように、桂月における美文は、文章ジャンルや文体に対する名称ではなかった。

むしろ、翻っていえば、文体やジャンルといった当時の文章表現を区分していたさまざまな位相への実践を、この「美文」という審美的な文章の総称という世界の中で絶えず行っていたといえるかもしれない。

これまで文章表現が近代化されたのちに回顧的な視点から美文は主として和文脈に基盤を置いた文体の一種であるとみられてきたが、桂月においてはジャンルや文体によって異なるあらゆる表現がその核である「感情」を表現することに収斂されていくということが観点となる文章表現の場であった。文章ジャンルや文体にとらわれることなく、それぞれのジャンルや文体、文字を使い分ける実践の集積が美文であったといっていよいだろう。

このように美文という文章を、詩的な文章をどのように表現していくかという、さまざまな文章表現の実践の場であったと捉えた時、美文は、近代文章表現史の中で近代化された文章表現にまで貫かれていたひとつの強い確たる中心点

となり得る意識を形成したといえるのではないだろうか。

注

- 1) 高須芳次郎「明治の美文と紀行文」（『日本文学講座』12、改造社、昭和9年）。なお、引用に際し、旧字は新字に改め、傍点・ルビ等は適宜省略した。以下の他の引用に関しても同様である。
- 2) 『早稲田文学』では第一次第三期第1号（明治30年10月）より「美文」欄が設けられたが、散文詩、小説、戯曲、短歌、紀行文などさまざまなジャンルの作品が収録されている。
- 3) 明治28年1月創刊『太陽』第1巻第1号の「地理」欄や明治32年5月の『淑女』第1巻第5号「地理」欄など明治30年頃より多くの雑誌において地理や紀行などの叙景に関する読者投稿欄が設けられた。「美文」欄には、『早稲田文学』の他に、『文庫』（少年園）なども挙げられる。この『文庫』では第14巻第4号（明治33年11月）から毎号複数の美文が掲載されていた。また『文芸倶楽部』（博文館）では、第5巻第13編（明治32年10月）、第5巻第14編（明治32年11月）と二度にわたり「美文」欄の読者投稿を募集したが、実際に投稿された作品が編集側の意図と異なる「美文」であったためなのか、その後の『文芸倶楽部』誌上において「美文」欄は実現しなかった。
- 4) 山本正秀『近代文体発生の史的研究』岩波書店、昭和40年
- 5) 久松潜一「解題」（『明治文学全集41』筑摩書房、昭和46年）

- 6) 進藤咲子「明治の美文」(鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法』10 辞法編、明治書院、昭和59年)
- 7) 『花紅葉』の引用は『明治文学全集41』(筑摩書房、昭和49年)に拠る。以下同じ。
- 8) 「時文 過去一年間の文壇」(『文芸倶楽部』第5巻第1編、博文館、明治32年1月)
- 9) 大町桂月「文章としての漢文の価値」(『精美』第53号、明治28年10月)
- 10) 大町桂月「半生の文章」(『文章世界』第2巻第11号、明治40年10月)
- 11) 武島羽衣「『花紅葉』の出版」(『桂月』第1巻第8号、大正15年6月)
- 12) 拙稿「『花紅葉』の受容と構成—美文教科書としての役割を中心に—」(立命館大学・国文学研究資料館「明治大正文化史研究」プロジェクト編『近代文献調査研究論集 第二輯』国文学研究資料館、平成29年)
- 13) たとえば小堀洋平氏は「明治三十年前後の紀行文におけるジャンルの越境と人称の交替—田山花袋『日光』を中心に」(『日本近代文学』第87号、平成24年11月)の中で、「人称」という視点から、旅という枠物語を有する『花紅葉』における桂月の「荒寺」「須磨の一夜」「荒野の鶴鴿」などに関してジャンルの分類が難しいと指摘している。

付記

本稿は第138回表現学会東京例会(2016年7月30日)での口頭発表「『花紅葉』にみる大町桂月の美文意識—紀行文「日光山の奥」をめぐる—」に基づいたものである。さまざまなご助言をくださった

方々に深く感謝申し上げます。

本研究は、JPSP研究費16JG00418の助成を受けたものである。

また、本稿は未公開の博士学位論文の一部である。

(立教大学大学院生・日本学術振興会特別研究員DC)